
天使の仕事 ～ キャラ紹介 ～

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仕事 ～キャラ紹介～

【Nコード】

N1262T

【作者名】

アオ

【あらすじ】

ここでは、『天使の仕事』本編で出たキャラクターを、アオとアオイの会話形式で紹介します。一応のネタバレ防止策を張っておりますので、タイトルに注目してください。

例：最初の紹介はアオイですが、タイトルに1～3章と書いてありますが、これは1～3章まで出たアオイの設定を紹介しているという意味です。

尚、この紹介は本編とはあまり関係が無いので、読まなくてはいけないと言つ訳ではありません。

加えて、ここに書かれる設定とかはあまりあてにならないと思いますので参考程度に抑えて置いてください。
最後に、ネタバレは完璧には防げないと思うのでお気をつけください。

アオイ 1～3章（前書き）

こんにちは、アオです。

都合により本編の投稿が出来ませんでした。申し訳ございません。

一応、本編の代わりとしてこの文章を投稿します。

ここでは、キャラの紹介を会話形式でします。一応ネタバレ防止として策を張っていますので、詳しい内容は下の文章でお確かめ下さい。それと、最後の方に紹介したキャラのプロフィールを載せますので、それだけ見たい方は、下までスクロールして下さい。

今回は？アオイ？の紹介をします。

—— 天使の仕事シリーズ、天使の仕事 ― キャラ紹介 ― に移動しました。

アオイ 1〜3章

こんにちは、アオです。

都合により本編の投稿が出来ませんでした。申し訳ございません。

一応、本編の代わりとしてこの文章を投稿します。

ここでは、キャラの紹介を会話形式でします。一応ネタバレ防止として策を張っていますので、詳しい内容は下の文章でお確かめ下さい。それと、最後の方に紹介したキャラのプロフィールを載せますので、それだけ見たい方は、下までスクロールして下さい。

今回は？アオイ？の紹介をします。

アオイ「キャラクター紹介のコーナーが始まります！」

アオ『始まります』

アオイ「さてさて、今回はキャラクターの紹介をするようだけど、最初は誰を紹介するの？」

アオ『それは勿論アオイの紹介に決まってるでしょ』

アオイ「え、うそ！？」

アオ『本当だって、台本に書いてあるだろ』

アオイ「あー、実は私台本読んでなかったのよね」

アオ『仕事なんだからちゃんと読んどきなよ』

アオイ「誰かさんが毎回仕事を大変なものにしてくれてるおかげで、中々暇が取れないのよね」

アオ『照れますな。はっはっは』

アオイ「褒めてなんかないわよ。それより、どうしていきなりキャラ紹介のコーナーなんて作つたの」

アオ『なんで、と言いますと』

アオイ「だって、前に（二話目の次回予告の時）設定だとかはネタになるからあんまり紹介したくないみたいな事言ってたじゃない」
アオ『あー、それね』

アオイ「もしかして、もうネタ切れなの？」

アオ『いや、今日投稿するって前回書いたのに間に合わなかったもので』

アオイ「どうしてよ。たいした事情じゃなかったらストライキするわよ」

アオ『ちよつと、家庭の事情で・・・』

アオイ「具体的には？」

アオ『まず一つにパソコンが使えなかった』

アオイ「へー、壊れたの？」

アオ『そうじゃない。ただ、自分が使ってるパソコンは共用してあるので使える時間が短かったんだ』

アオイ「なるほどね。タイピングが遅いアオが一話書こうとするとかなり時間が掛かっちゃうわね」

アオ『そう。だから何となく頭の中で大体の構想は出来ていたキヤラ紹介を書いたわけです』

アオイ「へー、他に理由は？」

アオ『風邪が酷くて寝込んでました』

アオイ「それ前回にも書いてたわよね。まだ直ってなかったの」

アオ『アオイ、字が違うぞ』

アオイ「あらごめんなさい」

アオ『まあとりあえず、まだ治ってなかったというのも理由の一つだ』

アオイ「それなのにアオは学校に行ったの？」

アオ『学生は学校に行くのが仕事だからな』

アオイ「いや、風邪引いているんだったら休みなさいよ」

アオ『皆勤賞を狙っているので』

アオイ「・・・もういいわ。それじゃ、次話が投稿出来なかった理由はそんなものかしら」

アオ『まあ、概ねそうです。待っていた皆さん、申し訳ありませんでした』

アオイ「本当よ。アクセス解析見ると今日のユニークアクセスの数が昨日より多かったもの。でもまあ、それだけ期待されていたって事かしらね」

アオ『期待されていた皆様。本当にすみませんでした』

アオイ「その人達のためにも、新しい読者のためにも、今回のキャラ紹介、面白くするわよ」

アオ『わかった。でもいいの？面白くするって、今回紹介されるのはアオイだよ』

アオイ「う、いいわ。一肌ぬいでやろうじゃない」

アオ『わかった。じゃあさっそくアオイの紹介を始めようか』

アオイ「どうぞ」

アオ『因みにこのキャラ紹介はいろいろと脱線するので、プロフィールだけで見たい方は下までスクロールして下さい』

——キャラ紹介

名前（天使名）：アオイ

性別：女

職業：天使

初登場：一章・一話目（天使の仕事・プロローグ1）

紹介情報：一〜三章

アオイ「そういえば、これってネタバレとかにならないかしら」

アオ『そこは大丈夫。最初の方に初登場の話数とタイトルを書いておいたから』

アオイ「それは当然でしょ。私が言いたいのは、後から出てくる設定とかもあるんじゃないのかって事」

アオ『そこも大丈夫。あらかじめ最初の方に紹介する情報を書いておいたから』

アオイ「どうということ？」

アオ『例えば今回は紹介情報が1〜3章って書いてあるから、3

章までに出たそのキャラの設定を紹介するって事」

アオイ「なるほど、つまりは徐々に設定が明らかになるキャラも、制限された話数までしか明かされないって訳ね」

アオ『そういう事だね。面倒くさくてすみません』

アオイ「それじゃ今回は1〜3章までの私の紹介をしましょう」

アオ『へっへっへ。楽しい時間になりそうだな』

アオイ「なんか怖いけど、やるしかないのよね」

アオ『それじゃ、アオイの設定？は』

———？大食い

アオ『さーて、じゃあまずはこれを———』

アオイ「ちょおおとまったああああ！！」

アオ『どうしたの？』

アオイ「どうしたもこうしたもなーい！何なのよこれは！？」

アオ『いや、アオイの紹介だけど』

アオイ「だったら嘘を書くな！私は大食いじゃないーい！」

アオ『いや、大食いじゃん』

アオイ「ちがうわよ！あなた、花も恥らう乙女になんて事をいうのよ！」

アオ『それ、二回目だぞ』

アオイ「シャラップ！とにかく、私は大食いじゃないから。普通より少し食べる量が多いだけだから」

アオ『そこまで認めたくない？』

アオイ「認めるも何も、私は大食いじゃないもの」

アオ『そう。それではここで？ゲスト？に登場してもらいます』

アオイ「へえ。ゲストなんていたんだ」

アオ『まあね。それではゲストの方、どうぞ！』

ミドリ「こんにちはー」

アオイ「ミドリ？！」

ミドリ「そうだよー。アオさんに今日アオイちゃんの紹介があるからって、呼ばれたの」

アオ『来てくれてありがとう、ミドリ。それじゃ、さっそく質問いいかな。・・・勿論アオイについての』

ミドリ「もちろん！アオイちゃんについて私が知らないことなんて無いんだから！」

アオイ「ちょ、ちよっとまっ」

アオ『それではさっそく、普段アオイはどれだけ食べるのかな』

ミドリ「それはねー、いっぱい食べるよ」

アオ『具体的には』

ミドリ「一食で4人分くらいは食べるよ」

アオ『ほうほう、因みに前の話で出ていた大食い大会ではどれくらい』

ミドリ「あの大会ではホットドックを食べてたんだけど、50本くらいは食べてました」

アオイ「そんな、ミドリ」

ミドリ「あの時のアオイちゃんはかつこ良かったよー。次々と選手が倒れる中、ただ一人ばくばく食べてたんだから」

アオ『なるほど。ありがとうミドリ、質問は以上だからもう帰っていいよ』

ミドリ「それじゃアオイちゃん、またねー」

アオ『・・・』

アオイ「・・・」

アオ『いい友達を持ったな』

アオイ「・・・」

アオ『それで、反論は？』

アオイ「・・・」

アオ『アオイ？』

アオイ「ええそうよ！私は大食いよ！他の追隨を許さない大食い王よ！でもね、これにはちゃんと理由が・・・」

アオ 『はい、アオイ、ストップ。これ以上はネタバレだ』
アオイ 「うつ、わかったわよ」
アオ 『よし、じゃあ次に行くぞ（少しやりすぎたかな）』
アオイ 「ええ、そうしましょ」
アオ 『それじゃ、次、青いの設定？は』

――？面倒くさがり

アオイ 「・・・なんか、私の設定って駄目なのばかりじゃない？」
アオ 『まあ、しょうがない。ぱぱと終わらせるぞ』
アオイ 「まあ、そうね。確かに仕事は楽であることに越したことは無いわね」

アオ 『それは殆どの社会人が思ってる事だろうね』

アオイ 「でも本当に天使の仕事って大変なのよね」

アオ 『どんな感じ？』

アオイ 「休日が無い」

アオ 『ふむふむ』

アオイ 「高給でも使う暇が無い」

アオ 『自衛隊みたいだな』

アオイ 「一日にやる事がいっぱいある」

アオ 『一つの仕事が終わったらはい、次って感じだよ』

アオイ 「あと他にもあるけど、それを言ったらアオの数少ないネタが少なくなるから言わないでおくわね」

アオ 『ありがとう。でも、面倒くさがってるけどちゃんとやるのがアオイなんだよね』

アオイ 「まあ、一応はね」

アオ 『うん、えらいえらい』

アオイ 「もう、そんな事やってないで次に行くわよ」

アオ 『分かった。おっと、次が最後だな』

アオイ 「そうなの？結構少ないわね」

アオ 『一応最後のプロフィールにはここで言ったの以外にも載せるけどね』

アオイ「それについての紹介はいいの？」

アオ 『うん、これは説明がしづらいから』

アオイ「そうなんだ、それじゃ次が最後ね」

アオ 『うん、じゃあ最後のアオイの設定？は』

――？ツンデレ予備軍

アオイ「うらっしやあああー！」

アオ 『うわ、いきなりなんだよ』

アオイ「なんだよじゃなーい！こっちこそ何よー！」

アオ 『ツンデレ予備軍の事？』

アオイ「そうよ！」

アオ 『いや、でも予備軍だし別に良くない？』

アオイ「良くない！」

アオ 『どのへんが？』

アオイ「全部！」

アオ 『今、お前は全国のツンデレとツンデレ好きを敵に回したぞ』

アオイ「ふん、別にそんなのどうってこと無いわよ」

アオ 『あまいな、実に甘いぞアオイ君！』

アオイ「な、なによ」

アオ 『世界のツンデレ関係者は7割を超えるぞ！（この話はフィクションです。実際の人物、団体には一切関係ありません）』

アオイ「そ、そんなに？！」

アオ 『ああ、ツンデレはもうずっと昔から世界に進出していたんだ。（この話はフィクションです。実際の人物、団体には一切関係ありません）』

アオイ「それだけ数が私の敵って言うの？！」

アオ 『ああ、だがその数を味方につけることも出来る』

アオイ「そ、その方法は」

アオ『ツンデレであることを受け入れなさい。さすれば世界がアオイに味方する。（この話はフィクションです。実際の人物、団体には一切関係がありません）』

アオイ「わ、わかりました。私は今を以ってツンデレであることを認め、受け入れ、更なる成長をしたいと思います」

・・・

アオイ「満足した？」

アオ『うん、心に痞^{つか}えていたものが綺麗に無くなった気がするよ』

アオイ「そう、でもさっきのはあくまで冗談で、私はツンデレ予備軍じゃないし、なるつもりもないから」

アオ『そんなの冗談に決まってるだろ』

アオイ「え？」

アオ『アオイは特にそういう感じで行くつもりは無い』

アオイ「どういう意味よ」

アオ『そのままの意味だよ。アオイは口では嫌だといっても結局はちゃんとやってくれる天邪鬼^{てんじゃく}って言う設定なんだよ』

アオイ「なんかあんまり変わって無くない？」

アオ『そうかな？こっちの方が可愛いと思うけど』

アオイ「そう、じゃあまあ、それでいいわよ」

アオ『そうか、それは良かった』

アオイ「ただしそれでちゃんと面白い文章書きなさいよ」

アオ『もちろん、そのつもりだ』

アオイ「それじゃ、もうそろそろ終わりにするわよ」

アオ『うん。ああそれとアオイの友達はまだいる予定だから、そのうち出ると思う』

アオイ「そうなの、わかったわ」

アオ 『それじゃ、今回のキャラ紹介はここまでだね』
アオイ「いろいろと長かったけど、やり切れてよかったわ」
アオ 『それでは最後にプロフィールを載せます』

——キャラ紹介 アオイ（紹介情報：1～3章）

名前（天使名）：アオイ

性別：女

職業：天使

初登場：一章・一話目（天使の仕事・プロローグ1）

性格：面倒くさがり（しかし、やる時はやる）

天邪鬼

困っている人がいると放っておけない

生真面目

能力：魔術・妖術・聖術

特技：魔術・妖術・聖術・大食い

見た目：背中の羽は淡い青色。スタイルは上がちょっと可哀想な感じ。顔は決めてないので自分がそこそこ好きなキャラに青い羽を付けた姿でも想像してください

友人：ミドリ

好きな物・事：困っている人を助ける・食べ物・甘い物・空を飛ぶ
嫌いな物・事：面倒くさい物／事・計画がうまくいく人・本部から来る仕事（主に書類整理）

得意な物・事：書類整理・厄介事を持つてくる／巻き込まれる

苦手な物・事：仕事（とにかく遅い）

趣味：空中散歩・食事・人助け

人柄：面倒くさがりなので、いつも仕事に対して愚痴等を零しているが、それでもきつちりこなす生真面目な性格。天使の仕事は割りとか高給だが、いつも食費に消えているので万年貧乏。友人のミドリとは関係も良好で、たまに仕事を手伝い、手伝ってもらっている。

よく厄介事に巻き込まれる苦勞人体質だが、それもいつもの事なので、大抵のことには冷静な対処がとれてしまう可哀想な人。休日には家で寝ていたり、趣味の空中散歩をしているが、中々休日が取れない仕事なので最近は出来てない。

アオイ 1～3章（後書き）

今回本編を楽しみにして下さった皆様、すいませんでした。

このキャラ紹介コーナーでは出てきたキャラを紹介しますので、脇役でも紹介されることがあります。（作者の体力など、諸々がある場合）

それと、次回の本編の更新は次の土、日曜日にはしたいと思っています。

それとは別に、キャラ紹介は不定期で投稿します。

これから？天使の仕事？をどうぞよろしく願います。

————— 最後の方、一部修正しました。

————— 全体的に読みやすいように修正しました。

直人&麻衣（前書き）

こんにちは、アオです。

キャラ紹介コーナー二回目の投稿です。

何か会話形式の方が書きやすかったのでこっちをまた投稿しました。（他にも理由はあるけど）それにしても自分はゴールデンウィークに何してんでしょうね。

本編は前回のあとがきでも書いたとおり、次の土曜か日曜日に投稿します。

あと、最後の方にプロフィールを載せましたので、それだけを見たい方は下までスクロールして下さい。

それでは、今回紹介するのは直人と麻衣です。

——— 天使の仕事シリーズ、天使の仕事 ―― キャラ紹介 ―― に移動しました。

直人&麻衣

アオイ「キャラ紹介コーナー第二弾！始まります！」

アオ「始めたいと思います」

アオイ「それにしても続けて紹介コーナーを掲載するなんてどうしての？」

アオ「思い立ったが吉日って奴」

アオイ「本当にそれだけ？」

アオ「まあ、それ以外にもあるな」

アオイ「言ってみなさいよ」

アオ「理由はただ一つ、用事が無くなった」

アオイ「それは、衰しいわね」

アオ「そんな事で、紹介コーナーを更新しようと思ったわけ」

アオイ「本編を更新しなさいよ」

アオ「いやー、実を言うと本編書くよりこっちの方が書きやすいんだよね」

アオイ「それはどうして？」

アオ「会話形式だからさ」

アオイ「そうなんだ。私としては仕事を増やさないで欲しい所だけどね」

アオ「こーゆー地味なのを地道にコツコツやって、初めて人気が出るんだよ」

アオイ「だったら尚更本編を書きなさいよ」

アオ「ごめんなさい」

アオイ「ふう、もういいわ。さっさとこのコーナーの意義を全うしましょう」

アオ「おうともさ」

アオイ「それじゃ、今回は誰を紹介するの？」

アオ「今回はこの二人を紹介したいと思います」

——キャラ紹介

名前：桜井直人

性別：男

職業：高校2年生（だった）

初登場：一話目

紹介情報：1～2話＋α

名前：麻衣

性別：女

職業：高校2年生

初登場：一話目（但し、喋り始めたのは二話目）

紹介情報：1～2話＋α

アオイ「あら、一度に二人紹介するの？」

アオ「だってそうじゃないと短くて簡素な文になりそうだから」

アオイ「そう。それじゃお二人に登場してもらいます。どうぞ」

直人「どうも、直人です。こんにちは」

麻衣「麻衣です。皆さんお久しぶりです」

アオイ「さてさて、お二人に登場して貰った訳ですが、何を話しましょうか？」

麻衣「あの、ちょっと聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

アオイ「いいですよ。何ですか麻衣さん」

麻衣「それではアオさんに。どうして私たちの紹介をするんですか？」

アオ「ん？どういう意味？」

麻衣「私たち、最初の二話しか出てない脇キャラですよ。それなのに紹介なんていないん

じゃあ・・・」

アオ 「ああ、このコーナーは自分の気力と体力と根性が続く限り、どんなキヤラでも紹介しよう」

うっていうコーナーなんだよ」

アオイ「そうそう、ネタに詰まったときの逃げ道みたいなものね」

麻衣 「そうなんですか」

アオイ「質問はそれだけ？」

麻衣 「いえ、もう一つあります。なんで私たちはこんなに早く紹介されるんですか？」

アオ 「ああ、それはさっきアオイにも説明したけど——」

麻衣 「それは舞台裏から聞こえました。でも、それだけが理由じゃないですよ」

アオ 「うっ」

アオイ「なによ、アオ。まだ他にも理由があつたの？あるんだつたら正直に言いなさい」

アオ 「わかりました。アオイに言った理由も本当なんだ。ただ、それが一番の理由じゃない」

アオイ「もったいぶらないで早く言って」

アオ 「いやさ、早くやつちゃわないと二人の性格とかを忘れちゃいそうだったから」

アオイ「は？どういうこと」

アオ 「つまりは、二人がどんな喋り方だとかをしてたかっていうのを忘れちゃう前にさっさと

やつちゃおう、みたいな感じで・・・」

アオイ「アオ、あなた・・・」

直人 「駄目だなあ、あんた」

アオ 「すみません」

麻衣 「ま、まあ私たちの出番がまた直ぐにやってきたって事にしましょうと」

直人 「しょうがない、麻衣がそう言うんだつたら」

アオイ「それじゃ、説明を始めちゃいましょう」

アオ 「例のごとくプロフィールだけを見たい方は下までスクロールして下さい」

—— キャラ紹介

名前：桜井直人

性別：男

職業：高校2年生（だった）

初登場：一話目

紹介情報：1～2話 + α

アオ 「よし、気を取り直して、まず最初は直人の説明から行ってみよう」

直人 「俺の設定紹介か、つつても確かこの小説、衝動で書き始めたとか言ってなかったか」

アオ 「うぐつ。言っただけど、それが何」

直人 「いやさ、詳細な設定とかってちゃんとあるのかよ」

アオ 「それ、は」

アオイ「グダグダね。特に考えてもいなかったくせに紹介なんて始めようとするんじゃないわよ」

アオ 「ちゃ、ちゃんと考えてあったぞ。一応初期設定は何となく作ってあったから」

アオイ「へー、どんなの」

アオ 「まず、交通事故で死ぬ。ここの設定は当初より企画していた。次に未練、これは最初は

妹の設定だった。そしてさらに未練を晴らした後、アオイの霊界案内が始まる。そうして

霊界で楽しく暮らしましたとさ、おしまい」

アオイ「性格とかは」

アオ 「シスコン。あともうちよつとおとなしい性格。成績はまあまあ。と、こんなものかな。

他、詳細は思い出せない」

直人「俺、最初はシスコンだったんだ」

アオイ「それは、なんと言うか、没になってよかったわね」

アオ「でもシスコンのあたりは生かしておいて、対象を彼女に変更した」

麻衣「そんな裏設定があったんですか。でも、いいんですか？ここで暴露しちゃって」

アオ「別にいい。多分もう使わない設定だから」

アオイ「ふうん、まあいいわ。ところで紹介情報にある＋αって何」

アオ「ああ、それは本編では出なかったけど実はこんな設定でしたっていうやつ」

アオイ「そうなんだ。それじゃアオ、お願い」

アオ「分かった。直人設定その？は——」

——？彼女（麻衣）LOVE

アオイ「これはさっき言ってたわね」

アオ「うん、でも一応書かない訳にはいかないし」

アオイ「そうよね、その所為でいろいろな人達に迷惑掛けたんだから」

直人「——反省してます」

麻衣「元気出して直君。それだけ私を想っていてくれたって事でしょう」

アオイ「そうだろうけど、迷惑を掛けたのは事実よ」

麻衣「そ、そうだけど」

アオイ「それに、ふてぶてしくも最後は結局私頼りだったし」

直人「すいませんでした」

アオイ「恋は盲目って言っても、ちゃんと周りは見なくちゃ駄目よ」

直人「本当にご迷惑をお掛けしました。来世で善処します」

アオイ「・・・それでもまあ、最後まで諦めなかった姿勢と、その麻衣さんへの愛は評価するわ」

直人「ありがとう」

アオ 「それじゃあまあ、もうこの話は終わりにして次に進もうか」

アオイ 「分かったわ。次は何かしら」

アオ 「直人の設定その？は——」

——？実は割りと頭がいい

アオイ 「そうなの？」

直人 「そうだな、中学の頃は学年では中の上と上の下をいったりきたりしてたな」

アオイ 「へえ、そうだったんだ。因みに麻衣さんは？」

アオ 「おおっと、それは後でちゃんと紹介するよ」

アオイ 「そうだったわね。順序を間違えてみたい」

アオ 「それじゃ直人、高校での成績は」

直人 「高校でも上の下あたりだったな。俺が少しレベルを落とじて受験したからこれくらいが

普通だと思う」

アオイ 「へえ、それじゃ時間も推してる事だから次にいきましょうか」

アオ 「分かった。あと次が最後だから」

直人 「よし、言ってくれ」

アオ 「それじゃ、直人の設定その？は——」

——？料理が得意

アオイ 「・・・何この完璧超人」

直人 「いや、そんな事言われても」

アオ 「なんかこんなキャラを作ってたんだよね」

アオイ 「それにしたってアオ・・・」

麻衣 「確かに直君って料理がうまいよね。どうして？」

直人 「ああ、それは俺の親が離婚しただろ。それで俺は親父に引き取られたんだ。親父は料理

は少し出来るっていう程度で、しかも帰りはいつも遅いから必然的にな」

麻衣 「へー、そうだったんだ」

アオイ「良くある設定ね、それにしたって悔しい。なんで私の説明は散々だったのにこっちは

こんなにいい紹介されてるのよ」

アオ「それはまあ、キャラ？」

アオイ「うるさーい！そんな言葉で私が納得すると思ってるの!？」

アオ「分かったよ。次のアオイの説明はちゃんといい事書いておくよ」

アオイ「本当に？」

アオ「ああ、男に二言は無い。・・・事も無い」

アオイ「ちよつと、最後がもの凄く不安なんだけど！」

アオ「それはまあ、お約束というやつでして」

アオイ「はあ、結局信じるしか道は無いのよね」

麻衣「それじゃ、次は私の説明ですか？」

アオイ「ああ、ちよつと待って。読者の人達に桜井君がどれくらいの料理の腕前をしているのか

知ってもらわないと」

麻衣「確かにそうですね。ってそういえば直君っているいろいろと作れたよね」

直人「まあな。基本的なところからカレー、肉じゃが、あとちよつと凝ったものならグラタン、

ハンバーグ、まあ大体のものだったら作れるぞ」

アオイ「なんか、負けた気が」

麻衣「だ、大丈夫ですよ。私なんか全然作れませんから」

アオ「全然作れない人から慰めを貰ってもねえ」

麻衣「アオさん、そんな事言わないで」

アオイ「ぶつぶつ」

直人「なんか、まづかったかな」

アオ「しょうがない、次にいくか」

直人「いいのか？」

アオ「アオイは仕事の割り切りは出来るやつだからね。次の説明

に入れば元に戻ってるよ」

直人「そうか、じゃあ次にいこう」

麻衣「わ、私の説明ですね」

アオ「そうだね。それじゃまずは基本情報から」

—— キャラ紹介

名前：麻衣

性別：女

職業：高校2年生

初登場：一話目（但し、喋り始めは二話目）

紹介情報：1〜2話 + α

アオイ「さあ、説明を始めましょうか」

アオ「お、もう戻ったのか」

アオイ「ところでアオ、麻衣さんって名前だけしかないの？」

直人「そういえば苗字が無いよな」

麻衣「名前だけですよね」

アオ「ああ、それね。それはだね、苗字は無い方がいいかなって
思ってる」

アオイ「なんで？」

アオ「いや、ただの思いつき」

麻衣「ええー！そんな理由で私の苗字は無いんですか!？」

アオ「やっぱりだめ？」

麻衣「思いつきでもいいですからつけてください」

アオ「別にいいけど、将来は直人と同じ苗字になるんだよね」

麻衣「え、あ、はい」

アオ「よく、考えてみな」

・・・

アオ「・・・」

麻衣「・・・」

アオ「苗字欲しい？」

麻衣「いいです、私の苗字はただ一つだけですから」

直人「麻衣ーーーー？！」

アオイ「えーーーーー？！」

アオ「それじゃ、説明に入ろうか」

アオ「麻衣の設定その？は——」

——？体が弱い

アオイ「こーゆーのに男は弱いよね」

アオ「まあそうだね。何ていうかな、こっ、守ってやりたいって気持ちになるんだよね」

アオイ「直人もその口？」

直人「ちげーよ！・・・いや、ちょっとあってるけど。じゃ、なくて、もつと別の所に惹かれ

たんだ」

アオイ「へー、どんなところ」

麻衣「わ、私も気になるな」

直人「え、あ、それは、その・・・」

アオイ「もう、はつきりしないわね。男でしょ」

直人「う、そ、そんな事は別にいいだろ。ほら、今は麻衣の説明だろ、早くやろうぜ」

アオイ「しょうがないわね。それじゃ麻衣さん、病弱ってどんな感じ？」

麻衣「ええと、学校はいつも休んじやって、病院には顔見知りの先生がいます」

アオイ「それはどれくらいから」

麻衣「小さい時からずっとですね」

アオイ「ありがと。じゃあ、次の説明に行きましょうか」

アオ「分かった。麻衣の設定その？は——」

——？成績が悪い

アオイ「学校での順位はどれくらい？」

麻衣「中学の時は下の上と中の下を行ったり来たりしていました」
アオイ「それは……。高校では？」

麻衣「真ん中より少し下くらいです」

アオイ「なんで桜井君は成績がいいのかしら。中学の時は不良やってたんでしょ」

直人「不良やってても授業を受けて、ノートもちゃんととってたからな」

アオイ「中途半端な不良ね」

アオ「自分は授業まじめに受けて、ノートもしっかり書いてるのに成績があまり良くないぞ」

アオイ「テスト勉強、頑張ってたね」

アオ「うん。ああそれと麻衣はこれから成績が上がるぞ」

麻衣「え、そうなんですか？」

アオ「うん。あの一軒の後、少し元気になって学校にもあまり休まずに行ってる設定だからね」

アオイ「そうだったんだ。よかったじゃない麻衣」

麻衣「はい」

アオ「それじゃ、次に行こうか」

アオ「麻衣の設定その？は——」

——？料理はあまり得意ではない

アオイ「うわ」

アオ「これは」

直人「あーあ」

麻衣「ふえーん」

アオイ「これは、なんで？」

アオ「才能」

直人「知られちまったか」

アオイ「武士の情けで次に行きましょうか」

アオ「そうだね。あと、次が最後ね」

直人「分かった。早く頼む」

アオ「麻衣の設定その？は――」

――とても前向きな強い子

アオイ「これは作中にも書かれてたわね」

アオ「そうだったね。これで直人は決心したんだったな」

アオイ「そういえばさ、麻衣さんはいつから桜井君の事好きだったの？」

麻衣「え？」

アオイ「二話で麻衣さんが桜井君の事好きだったみたいなのが書かれてるわよ」

直人「それは気になるな」

アオイ「そうよ、不良を好きになるなんて何かあったに決まってるわ」

麻衣「ええと」

アオ「これはキャラ紹介だから言わないとまずいよ」

麻衣「わかりました」

麻衣「私が直君を好きになった理由は、とても優しいからです」

麻衣「ある日、直君が捨て猫を見つけたのを遠くで見たんです。

私は直君は不良だと思ってい

たので捨て猫に何かするんじゃないかと不安になって見てたんです。そしたら直君は猫

に餌をあげて、帰ってしまいました。次の日も、その次の日も、直君は捨て猫に餌をあ

げていました。それから桜井直人という人が少し気になっ
て見ていると、他にも困っ

ている人がいたら助けにいたりしていたんです。その頃から
多分私は直君のことが好き

だっただんだと思います」

アオイ「・・・」

アオ「・・・」

麻衣「・・・？」

アオイ「桜井君、すごすぎ」

アオ「核の違いを感じますな」

アオイ「もう無理、なんでこうなったのよ」

アオ「リアクションに困っちゃまうぜ」

アオイ「もういいわ、さっさと終わりにしましょう」

アオ「そうだね」

直人「う、ん。よく分からないけど終わりにしようか」

麻衣「そうですね。結構長くなってしまいましたし」

アオ「ああそれと、もしかしたら気が向いて、気力と体力と根性と精神力と時間があつたら

おまけとして二人の過去のなやつを拡大バージョンで書くかも」

アオイ「またあんたはそうやって無茶なことを」

アオ「それでは最後に二人のプロフィールを載せます、どうぞ」

——キャラ紹介 直人&麻衣

名前：桜井直人

性別：男

職業：高校2年生（だった）

初登場：一話目

紹介情報：1〜2話 + α

性格：真面目

少し頭に血が上りやすい

一途

特技：家事全般

見た目：身長は170cm台。ルックスは普通

友人（恋人）：麻衣

好きな物・事：家事・デート

嫌いな物・事：特になし

得意な物・事：家事全般

苦手な物・事：麻衣の泣き顔

趣味：新作料理を編み出すこと

人柄：麻衣を愛している（元）高校二年生。普段は温厚だが、麻衣の事が絡むと豹変する。学校ではバカップルと評されているが、本人は麻衣さえ嫌じゃなければいいと思っている。上を見ても分かったおり、結構な家事好き。学校では麻衣の弁当を作ったりなどもしていた。麻衣とは中二から付き合い始めている。かなりのバカップル（大事な事なので二回言いました）

名前：麻衣

性別：女

職業：高校2年生

初登場：一話目（但し、喋り始めたのは二話目）

紹介情報：1〜2話＋α

性格：温厚

生きている間は諦めない

おとなしい

特技：特になし（必死に作っている）

見た目：いろいろとちっこい。何かもうちっこい。髪は肩より少し下くらいまである。黒髪。

友人（恋人）：桜井直人

好きな物・事：小動物・直人と過ごす時間

嫌いな物・事：苦いもの・酸っぱいもの

得意な物・事：特になし（本人は涙目で否定）

苦手な物・事：勉強・運動

趣味：読書・直人と話す

人柄：ずっと病弱だったせいか、比較のおとなしい性格。しかし、どんな事でも最後まで諦めないという強い精神を持つ。直人とは中

二のときから付き合い始め、今も尚、その愛に衰えは見えない。割と甘えん坊で、直人には甘えないようにしようとも思っているが、それが実行されたためしは無い。直人本人としては、甘えて欲しいと思っている。勉強は大体中の下をキープしている。学校を休んだ日には直人が書いたノートを見たりしているが、成果はあまり無い。家事が壊滅的ではないにしても、それでもやっぱり下手。直人との愛称はある意味拔群といえる。直人の死後、次に直人と会ったときのためにと、勉強と家事を頑張っている。

直人&麻衣（後書き）

いかがでしたでしょうか。

直人と麻衣はバカップルの設定なので、書いてるとき辛かったです。ちくしょう、相手が欲しい。

とまあ、冗談はさておきまして、さっき書いたとおり気力と体力と（以下略）があれば、二人の過去話なんかもおまけで書こうと思っています。

初投稿&初執筆なのに何やってんでしょね。

それでは、次回の本編の後書きでまた会いましょう。

ミドリ（前書き）

こんにちは、アオです。

キャラ紹介コーナー第三弾、やっと更新できました。

テスト前なのに何やってんだって感じですけど悔いはあまりありません。

本編の方はテスト前なので、5月28か29辺りにでも更新します。だったらこんなもの投稿してないでさっさと勉強しろ or 本編を更新しろと思う方、すいません。こっちの方もちよくちよく更新しないとネタが溜まってしまうのです。まだ連載初期なのにネタの飽和状態で苦しんでいる命知らずな新人作家をどうか生暖かい目で見守ってやってください。

遅くなりましたが、今回紹介するのはミドリです。

尚、この小説と同時に世界観設定の方も第一弾を投稿したのでそこらも見ていただけるとありがたいです。

ミドリ

アオイ「キャラ紹介第三弾！」

アオ『始まります！』

アオイ「あれ、アオ何かいつもと違うね」

アオ『おう、分かりやすいように括弧の形を変えたんだ』

アオイ「なるほど、考えたわね」

アオ『これ以前のやつもその内変えようと思う』

アオイ「ま、頑張りなさい」

アオ『ではキャラ紹介に入りたいと思いますがその前に一つ言いたい事があります』

アオイ「へえ、何かしら」

アオ『少し、説明方法を変えようと思ひまして』

アオイ「どんな風に？」

アオ『前回と前々回は設定その？みたいな感じで説明していましたが、あれをやめます』

アオイ「何でよ」

アオ『やり辛い』

アオイ「なんとも率直な意見ね・・・」

アオ『あ、いや、他にもちゃんと分かりやすいように——』
アオイ「それ、明らかに後付けでしょ」

グサリ！

アオに40のダメージ！

アオの体力はもう無い！

アオの目の前は真っ暗になった。

アオイ「つてこら！逃げな」

アオ『うつつ、すみません』

アオイ「まだ感心なこと聞いてないわよ」

アオ『え、何』

アオイ「紹介方法よ。変わったんでしょ」

アオ『ああそれね。紹介方法は、プロフィールに載ってる項目を聞いていくって感じ』

アオイ「無難ね」

アオ『まあ、そうだね』

アオイ「そもそも何でこのやり方で紹介しなかったのよ」

アオ『最初はどんな感じで紹介すればいいのか分からなかったのと、プロフィールの項目を考え

てなかったのと、そもそもその案が思い浮かばなかった』

アオイ「だめだめじゃない」

アオ『自分の計画性の無さに自分でも驚いた』

アオイ「今度からはもうちょっと計画を練ってからやるように」

アオ『はい』

アオイ「それじゃ、紹介を始めましょうか」

アオ『分かった。今回はミドリを紹介します』

アオ『尚、プロフィールだけを見たい方は下までスクロールして下さい』

—— キャラ紹介

名前（天使名）：ミドリ

性別：女

職業：天使

初登場：三話目（天使の届け物）

紹介情報：三話目

アオ『それじゃ、ミドリに登場してもらおうかな』

アオイ「つてあれ、いないわよ」

アオ『え、うそ』

ミドリ「じゃじゃーん」

アオイ「あ、ミドリもう入ってたの」

ミドリ「うん、今回は私の紹介だから張り切ってるんだ」

アオ「いい心がけだな」

アオイ「それじゃ、紹介しましょうか」

アオ「とりあえず名前からいく？」

アオイ「いいわよ」

ミドリ「私もいいですよ」

アオ「それでは、ミドリって名前は分かっており色から取りました」

アオイ「私の名前も？」

アオ「うん」

アオイ「私てつきりわざとアオと似た名前なのかと思ってた」

ミドリ「因みにアオさんの名前も色から取っているんですか？」

アオ「それは違うんだな」

アオイ「違うの？」

アオ「これは単に、自分のカッコいいニックネームを考えてたらこんなになった」

アオイ「由来とかも聞いて大丈夫？」

アオ「自分の名前のイニシャルがA・Oだったからアオ」

ミドリ「そうだったんですかー。カッコいいですね」

アオ「お、ミドリもそう思う？」

アオイ「・・・まあ、価値観は人それぞれということだ」

アオイ「因みに他にも色の名前のキャラを出したりするの？」

アオ「もちろん。天使だけじゃ飽き足らず人名にも使う予定だ」

アオイ「そうなんだ。じゃあ、次にいきましょっか」

ミドリ「次は性格ですか？」

アオ「うん。それじゃここはアオイに紹介してもらおうか」

アオイ「わかったわ。ミドリの性格は、そうね、おっとりした子ね」

ミドリ「私そんなにおっとりさんかな」

アオイ「ええ、割と」

アオ「ミドリの性格は初期段階あたりからもう決まってたんだよ」

ね」

アオイ「そうなの」

アオ『うん。アオイの性格にあう友達はこれしかないだろう、み
たいな』

ミドリ「相性バッチリってことですね」

アオ『まあそう言えなくも無いかな』

ミドリ「やったー」

アオイ「じゃあ、次にいきましょうか」

アオ『次は、特技だね』

アオイ「ミドリ、あなた特技って何かあった？」

ミドリ「一応あるよ」

アオイ「へー、何かしら」

ミドリ「妖術が得意だよ」

アオイ「そういえばミドリは妖術が割とすごかったわね」

ミドリ「それでもアオイちゃんには及ばないけどね」

アオイ「何言ってるのよ。私のは器用貧乏みたいなもので、妖術と
かに限ればミドリの方が上よ」

ミドリ「そっか、ありがとうアオイちゃん」

尚、妖術の設定はミドリのキャラ紹介と同時に掲載しています。
場所は『天使の仕事』世界観設定』
です。よかったらこれも読んでください。

アオイ「でも残念ながらこれは特技じゃないわね」

ミドリ「そうなの？」

アオイ「これはどちらかというと得意な物・事よ」

ミドリ「そう言われればそうだね」

アオイ「って事で他に無い？」

ミドリ「うーん。アオイちゃん、何か無いかな」

アオイ「私に振るの？」

ミドリ「うん、お願い」

アオイ「そうね、ミドリの特技、ミドリの特技——」

アオイ「あっ」

ミドリ「思いついた？」

アオイ「ミドリは高速飛行ができるじゃない」

ミドリ「え、でもあれってそこまで速くないよ」

アオイ「何言ってるのよ。普段は**そいつ**に空を飛ばせたら空中の暴走

族じゃない」

ミドリ「そんなに凄いな、アレ」

アオイ「すごい。それが駄目だったら特技が無くなっちゃうじゃない」

ミドリ「別にいいよ無くても」

アオイ「駄目、はいこれ特技決定」

ミドリ「分かったよ、それじゃあ次にいく？」

アオイ「もう他には無いかしらね」

アオイ「いや、もうない」

アオイ「そんなはつきり言わなくても」

ミドリ「大丈夫だよアオイちゃん」

アオイ「そもそも特技なんて一つでもあれば十分でしょ」

アオイ「まあ、そうだけど」

アオイ「それじゃあ、次は能力の設定紹介をしますか」

アオイ「天使とかそういうのだけにある特殊な項目ね」

アオイ「それぞれ」

アオイ「じゃあやりましょうか」

アオイ「ミドリは、妖術・霊術・聖術が使えるな」

アオイ「あれ、何か見慣れない単語が」

アオイ「霊術のことでしょ。これは回避し切れなかった」

ミドリ「ネタバレになっちゃいますね」

アオイ「大丈夫だ。あらすじの所に若干のネタバレはあるって書いてる」

といたから』

アオイ「まあ、それを承知で読んでしょうから大丈夫かしらね」
アオ『よし、次に言ってみよう』

ミドリ「次は見た目ですね」

アオイ「ミドリの外見は、少し茶色が入った長い髪で後ろの方で結んでるわね。顔も美人の部

類で、羽も若干緑色で綺麗よね」

アオ『スタイルはご想像にお任せします。けど、普通よりは出るところ出てます』

ミドリ「そんな抽象的な言い方じゃイメージしづらいですし気になっちゃいますよ。」

それと、アオイちゃんのは言わなくていいんですか？」

アオ『まあ、ぶっちゃけるとアオイは胸の大きさはCカップ位で、ミドリはDカップ位』

アオイ「ちよつと何言ってるのよ!？」

アオ『いや、聞かれたから』

アオイ「だからって答えないでよ!」

アオ『この前のキャラ紹介で言えなかったからさ』

アオイ「それでも別に言わなくていいじゃない!」

ミドリ「大丈夫だよアオイちゃん。アオイちゃんのは普通くらいだから」

アオイ「ミドリ・・・」

アオ『多分ね』

アオイ「多分って何?!」

アオ『いや、世の平均を知らないから。多分これくらいが普通じゃね、って感じで考えた』

アオイ「え、じゃあ世の平均が大きかったら私の設定は変わるのね!」

アオ『それはない。変わるのはミドリだけ』

アオイ「なんでよー!」

ミドリ「アオイちゃん。大きさが全てじゃないから」

アオ『そうだぞアオイ。いくらスタイルがよくても性格が駄目じや駄目だからな』

アオイ「ふん、別に慰めなんかいらないわ。私はこれで満足してるもの」

アオ『アオイ・・・』

ミドリ「アオイちゃん・・・」

アオイ「そんな目で私を見ない！ほらさっさと次にいくわよ」

アオ『分かった。次は友人かな』

ミドリ「私の友人はアオイちゃんだよー」

アオイ「ちよつとミドリ、抱きつかないでよ」

アオ『これは、もういつそ恋人にでもするかな』

アオイ「やめなさい」

スパーン！

アオ『うお、いきなりハリセンで叩くなよ。つーかどっから出したんだ』

アオイ「聖術で作ったのよ」

アオ『また無駄に能力使って』

ぎゃあぎゃあ

ミドリ「お二人さーん、早く次をやりましょう」

アオ『そうだね』

アオイ「あれ、もういいの」

アオ『しいて言うなら友人はもう一人いる』

アオイ「誰？」

アオ『その正体はいずれ分かるよ』

アオイ「うーん、どんな人だろ」

アオ『このキャラはまだ出てないんだ。だから極力ネタバレを避けるために言わないんだ』

アオイ「なるほど、それじゃ出てくるまで楽しみにしようっと」

アオ『それじゃ、次の紹介は』

アオイ「好きな物・事ね」

アオイ「それでミドリ、好きな事は？」

ミドリ「寝る事かな」

アオイ「・・・随分健康的ね」

ミドリ「そうかな？」

アオイ「もういいわ。他には」

ミドリ「書類整理かな」

アオイ「なんであんなのが好きなのよ」

ミドリ「アオイちゃんの手伝いをしてる内にだんだんと」

アオイ「そうなんだ。いつも手伝ってもらって悪いわね」

ミドリ「別にいいよ。好きでやってる事だから」

アオイ「ありがと、それじゃ次にいきましようか」

アオ『次は——嫌いな物・事だね』

ミドリ「特に無いと思うな」

アオイ「本当に？もうちょっとよく思い出してみなさいよ」

ミドリ「うーん」

アオイ「どう？」

ミドリ「あ、思いついたよ」

アオイ「何かしら」

ミドリ「私ね、ずるい事とずるい事をする人があまり好きじゃないかな」

アオイ「なるほどね」

アオ『ええ娘や』

アオイ「そうね、どっかの誰かとは大違いね」

アオ『アオイ、そこまで自分を責めるなよ——』

アオイ「あんたよ、あんた！」

アオ『じゃあ嫌いな事が分かったから次にいこうか』

アオイ「無視するな——！」

アオ『あれ、アオイどうしたんだ？』

アオイ「く、もういいわよ。次ね、次は得意な物・事よ」

ミドリ「今度こそ、妖術が得意だよー」

アオ『よかったな、ミドリ』

ミドリ「はい！」

アオイ「えーと、他には？」

ミドリ「うーん、特に無いかな」

アオイ「それ、二回目よ」

ミドリ「こういうのは自分じゃなくて他人の方が分かるものなんだよ」

アオイ「つまり私に考えて欲しいと」

ミドリ「ごめんねアオイちゃん。でもお願い」

アオイ「そうね、ミドリは——」

アオイ「そうだ、ミドリは料理が得意じゃない」

ミドリ「アオイちゃんがそう言うならそうなのかな」

アオイ「そうよ。私もミドリから料理を偶に教わったりするし」

アオ『そうだったんだ』

ミドリ「はい、でもアオイちゃんは筋がいいから教えたことをどんどん吸収しちゃって最近は教

えられる事が殆ど無いんですよ」

アオ『へー』

アオイ「ま、こんなものかしらね」

アオ『じゃあ次にいきますか』

アオイ「次は苦手な物・事ね」

ミドリ「苦手な事かー。私、魔術が苦手だな」

アオイ「そういえばそうだったっけ」

ミドリ「うん。アオイちゃんと違って私は魔術がどうにも」

アオイ「いや、でもいいんじゃない」

ミドリ「そうかな」

アオイ「そうよ。苦手って言っても普通よりちょっと劣る程度だから気にしないでいいと思う

わよ」

ミドリ「ありがとうアオイちゃん」

アオイ「それで、他には何かある？」

ミドリ「あと私油っこいものもだめかな」

アオイ「どうしてよ。おいしいのに」

ミドリ「トラウマを植えた本人が言っても・・・」

アオイ「アレくらいどうって事ないでしょ」

ミドリ「だって目の前であんなにたくさん揚げ物だとかがあってその匂いをいっぱい嗅いだら

さすがにトラウマにもなるよ」

アオ『どれだけ食べてんのさ』

アオイ「ちよつとよ、ちよつと」

ミドリ「あれをちよつとって言うのは・・・」

アオイ「もういいでしょその話は。はいもうおしまい」

ミドリ「他に苦手な事とかはもうないよ」

アオイ「あらそう。それじゃ最後の項目、趣味をやりましょう」

ミドリ「趣味はね、寝る事とお料理かな」

アオ『一つ目はともかく二つ目は中々女の子っぽいな』

アオイ「そうね、お嫁さんに欲しい感じ」

ミドリ「ちよつと照れちゃうかな」

アオ『他には何かないのかな』

ミドリ「他は、さっき言った書類整理かな」

アオイ「私のせいとはいえ、物好きよね」

ミドリ「あ、もちろんアオイちゃんと一緒に限るよ」

アオ『美しい友情だねえ』

アオイ「アオはちよつと黙ってなさい」

ミドリ「他にはもうないよ」

アオイ「そうなの、それじゃこれでお開きにしましょうか」

アオ『そうだね』

ミドリ「今回は楽しかったよ」

アオ『楽しんでもらえてなによりだ』

アオイ「あとは読者の皆さんも楽しめるかどうかね」

アオ『うん。キャラ紹介も楽しんでもらうためにこうやって会話形式で書いてるから少しは

楽しんでもらいたいね』

アオイ「まあ、それでも文章が面白くなかったらやっぱり面白くないんだけど」

アオ『努力します』

アオイ「それでは次回にまた会いましょう、さようなら」

アオ『最後にキャラクターのプロフィールを載せます』

注意

このプロフィールには上記で紹介したもの以外の事も載せる事があります。それと、上記とは若干言い回しが異なる場合、上記で紹介した順番と項目の順番が異なる場合もあります。ご了承ください。

——キャラ紹介 ミドリ

名前（天使名）：ミドリ

性別：女

職業：天使

初登場：三話目（天使の届け物）

性格：おっとり

天然

友達思い

能力：妖術・魔術・霊術・聖術

特技：高速飛行

見た目：少し茶色が入っている髪を後ろで結んでいる。

羽が若干緑色

スタイルは、出るところが普通より出てる位

友人：アオイ

好きな物・事：睡眠・アオイと一緒にやる仕事

嫌いな物・事：ずるい事・ずるい事をする人

得意な物・事：妖術・料理

苦手な物・事：魔術・油っこい料理

趣味：睡眠・料理・アオイと一緒にやる書類整理（要はアオイの手伝い）

人柄：アオイの親友で割と一緒に行動をしている。ミドリはアオイと違い仕事のペースが遅いわけではなくて、むしろ少し速い部類なので余裕ができた時などはアオイの手伝いをしていたりする。ミドリはその性格故に誰からも親しまれて、皆のマスコットのような存在にされている。しかし、アオイといつも行動し、言動が偶に妖しかったり（誤字にあらず）するので百合疑惑をもたれていたりする。普段はおっとりしている性格だが、空を飛ぶスピードはかなり速いなので、スピードを活かした仕事がよく回ってくる。天使としてのランクはアオイより少し高い程度。術のレベルも平凡なのでこれ位が妥当な所。料理が趣味で、偶にアオイに教えていたりする。

ミドリ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回のミドリの設定ですが、一回で紹介するか複数回で紹介するか悩みましたが何かもう設定とかが思いつかなかったので一回だけの紹介となりました。

それでも、やっぱり何かしらここで紹介されていない設定が出てくるかもしれませんが、そんな時は、出たよ、とか思ってたさって結構です。寧ろそう思ってください。

ミドリはアオイ大好きっ娘なので少し書いて楽しいキャラですが、喋り方とかが誰かと被りそうで、いろいろと試行錯誤してるためころころ変わったりしてと思います。ご了承ください。

尚、ここでは書きませんでした。ミドリにはもう一人友達がいる予定です。当然ですが、その人もアオイの友達です。近い内に本編に登場させようと思っているので楽しみにしててください。

町井光太（前書き）

こんにちは、アオです。

なんとか連載を再開する事が出来ました。

しかし今までと違う点が一つ、それは更新が遅くなる事です。今までだって結構遅かったのが更に遅くなります。

頻度で言えば2週に1回出来るかどうか？という感じです。

でもあともう少しで夏休み&書き溜めがあるのでもしかしたら何とかなるかもしれません。夏休みはともかくとして、書き溜めを使えば一定の間は週1で更新できそうです。

夏休みの方は、・・・余り期待しないでお待ちください。

それでは、今回紹介するのは熱血教師の町井さんです。

町井光太

3年〇組 町井先生！！

アオ 『イエー！！』

アオイ 「キヤー！！」

町井 「えと、どうも」

アオイ 「どうしたんですか町井さん、テンションが低いですね」

アオ 『いきなりこんな出だしでこれたら普通引くか驚くだろ』

町井 「まあ、そうですね・・・」

アオイ 「でもこれはやらなくちゃ駄目でしょ」

アオ 『確かにアオイの言い分にも一理ある』

アオイ 「でしょ」

アオ 『でもやるんだったらちゃんと打ち合わせしてからにしようか』

アオイ 「う、そうね」

町井 「アオイさん、気を落とさないてください。次に活かせばいいんです」

絵美 「そくだよお姉ちゃん」

アオ 『あ、絵美ちゃんいたのか』

アオイ 「こんにちは絵美ちゃん」

絵美 「こんにちは、お姉ちゃんとお兄ちゃん」

アオ 『・・・お兄ちゃん、なんて甘美な響きなのだろう』

アオイ 「感動してるとこ悪いけどその発言はやめておいた方がいいわよ」

アオ 『何を言う！世の中の男性の役80%は妹に（もしくはそれに通ずる女子に）お兄ちゃん』

と呼んで貰いたいと思っているんだぞ』

アオイ 「世の中にはそんなに多くアレな人がいたのね」

アオイ「と、いけない。話が少し脱線したわね」
アオイ「今回のキャラ紹介では町井さんを紹介します」

——キャラ紹介

名前：町井光太

性別：男

職業：中学教師（担当は社会）

初登場：4話目（天使の撮影）

紹介情報：4～6話

アオイ「よし、それじゃ紹介という名の質問をしましょうか」

アオイ「アオ、よろしく」

アオ『では最初に・・・』

アオ『特技は何ですか？』

町井「特技か・・・」

アオイ「悩んでますね」

町井「はい、特にそういうのを意識した事は無いので」

アオイ「それでは今回はゲストを呼んだのでその人達に手伝って貰いましょう」

アオイ「もう入ってきていいよー」

直人「うーす」

麻衣「こんにちは」

町井「なるほど、二人の事だったのか」

アオイ「はい。この二人なら先生の事も一杯知ってるでしょうし」

町井「これは心強いな」

直人「・・・しっかりしてくださいよ、自分のことなんだから」

町井「はは、まったくだ」

アオ『じゃあ二人に答えてもらおうか。町井さんの特技って何？』

直人「スナイパーの特技といたら一つしかないよな」

麻衣「うん、あれだね」

アオイ「なにになに」

直人「スナイパーの特技、それはチヨーク投げだ」

アオ『それはまた・・・』

アオイ「因みにどれくらいの命中精度なの？」

直人「一番後ろの席の奴の眉間を正確に撃ち抜く事が出来る」

アオ『すごいな』

アオイ「町井さん、そんな事が出来たんですか」

町井「教師としては当然のスキルですよ」

直人「言い切ったよこの人」

アオ『今までチヨークを本当に投げる人に出会った事が無いんだけど、あれって教師の必須

スキルだったんだ・・・』

アオイ「あ、もしかしてスナイパーってあだ名はそこからきてるの？」

直人「半分正解かな」

アオイ「もう半分は？」

直人「それは後で知る事になるさ」

アオイ「分かったわ。じゃあ他に特技は？」

直人「チヨーク投げだけだな」

アオイ「よし、じゃあ次に進みましょうか」

アオイ「では次に質問、好きな事・物は」

町井「綺麗なものや美しいもの。後は写真撮影と教育と子どもですな」

アオイ「いっぱいありますね」

アオ『中々仕事熱心な人だ』

町井「それほどでもありませんよ」

直人「いや、これは割りとおるほうだと思うけど」

麻衣「好きなものがいっぱいあるのはいい事だと思うよ」

アオ『よし、じゃあ次いつちやうか』

アオイ「次は——嫌いな物・事ですな」

町井 「陰口などは嫌いですね」

アオ 『なんか、まんまだね』

アオイ 「真面目でいいじゃない」

直人 「言っただったら本人の前で堂々と、がモットーだったよな」

町井 「ああ、その方が言ってる方も言われてる方もすつきりする
だろ」

アオ 『すつきりするかは分からないけど……。でもまあその考
えは分かるな』

麻衣 「でもなんで陰口なんていうんだろ」

アオ 『それについての持論があるんだけど、聞く？』

アオイ 「長くなる？ だったらやめて欲しいんだけど」

アオ 『ふむ。じゃあやめておく』

アオイ 「じゃあその話は置いて、次にいきましょうか」

アオ 『よし。次は、得意な物・事だな』

町井 「そうでうね。」

一つ目は先程言ったチヨーク投げですね」

アオイ 「さっき聞き忘れてたんですけどどれくらい飛ばせるんです
か？」

町井 「最大射程は20m程です」

直人 「すげえ」

町井 「二つ目は……。事務仕事ですね」

アオイ 「町井さん、天使になりませんか」

アオ 『事務仕事が得意と聞いて飛びついたな』

町井 「天使ですか、考えておきますね」

アオイ 「是非！！」

町井 「ほかに得意な事は、何かあったっけな」

町井 「うーん、無いようなので次にいきましょうか」

直人 「異議あり！！」

直人 「先生、あなたの発言はこの証拠品と矛盾しています！！」

アオイ 「なんかこの流れ、どっかで見たことあるような……」

アオ 『突っ込んだら負けだぞ、アオイ』

町井 「ふん、弁護人。いったい何と矛盾しているというのだね」

麻衣 「ノリノリですね、先生」

直人 「その証拠品とはこれです」

くらえ！！

町井 「こ、これは……。私が作ったテスト!？」

直人 「そう、これは先生が作成したテストです」

町井 「ふん、何が出てくるかと思えばテストだと、一体これが何の証拠となる」

アオイ 「ところであのテストってどこから出したのかしら」

アオ 『ここは何でもありの空間だからねえ』

直人 「その証拠品、注目すべき所は右上です」

町井 「右上だと?」

アオイ 「何を書いてあるのかしら」

アオ 『まあ大方の予想はつくけどさ』

直人 「右上に書かれている文字、先生、呼んでみてください」

町井 「平均点、46・・・」

直人 「そう、そしてそのテストで俺がとった点数は61点。これがどういう事が分かります

ね?」

アオイ 「分かる?」

アオ 『何となくは』

アオイ 「どういう事?」

アオ 『直人は頭がいい方だろ。そんな直人が64点しかとれなかった。という事は、』

直人 「そうだ先生。あなたの作るテストは難しいんだよ!!」

町井 「ふ、何を。それは勉強してなかったからだろう。そんなものの、何の証拠にもなりは

しない」

直人 「先生、あなたの作るテストはなあ、人の急所（皆が余り勉

強してなさそうな所」を的

確に狙って来るんだよ!!」

町井 「ふ、その何が悪い。ちゃんと勉強すれば点数が取れるようにはなっているぞ」

直人 「ああ、ちゃんと勉強すればな」

直人 「だが、社会だけに何時間も勉強する時間を割かなくてはならない。先生の作るテストで

100点ををとる為には、ノートを書いてそれをテスト前に見るだけじゃ足りねえ。

授業中に先生が言った教科書に書かれていない事項を覚える必要もある。そして一番辛

いのは、教科書を丸暗記、資料も丸暗記しなくちゃならな

い事だ。こんなのをテスト前にやってみろ、これじゃ社会の勉強だけで終わっちゃうだ

ろ」

アオイ「ところで麻衣さんはどう思う？」

麻衣 「え？」

アオイ「テストの難易度の事」

麻衣 「ああ、その事ですか。そうですね、結構難しいです」

アオイ「どれくらいとれてた？」

麻衣 「・・・毎回平均点に届きません」

アオイ「・・・頑張って」

麻衣 「うう・・・」

アオ 『どんまい麻衣。・・・あ、これって意外と――』

アオイ「アオ、ちょっと黙ろうか」

アオ 『はい・・・』

アオイ「くだらないこといつてる暇があるんだったらあの二人を止めてよ」

アオ 『ふう、分かったよ。』

アオ 『ねえお二人さん。もう面倒くさいからその辺にしてくれな

い」

町井 「おっと、つい話し込んでしまったようですね」

直人 「悪い悪い」

アオ 『じゃあとりあえず得意な事は？いやらしいテストを作る？
でいい？』

町井 「・・・その言い方を変えてくれれば意義は無いです」

アオ 『よし、じゃあ次』

アオイ 「強引ね。えーと次は苦手な物・事ね」

町井 「子どもの涙と絵美のお願いですね」

直人 「・・・何か一つ変なのが混じっていた気が」

アオイ 「桜井君だって麻衣さんの泣き顔が苦手じゃない。似たようなものよ」

絵美 「お父さん、私そんなにお願いしてないよ」

町井 「だからこそ駄目なんだ」

絵美 「???」

アオイ 「この話はこれでおしまいにしましょうか」

アオ 『そうだな。次は——趣味だな』

町井 「趣味は写真撮影です」

アオイ 「ま、予想通りの回答ね」

直人 「先生は写真の何処にそんなに魅せられたんだ？」

町井 「前に教えただろう」

直人 「そういえば教えられたな、授業で」

町井 「あれだって立派な教育だ」

直人 「別に何も言っただろ」

アオイ 「えーと、もしかして二人の仲はそんなによろしくないの？」

麻衣 「気にしないでいいですよ。あれが二人の普通ですから」

アオ 『まあいいや。それで町井さん、他には無いの？』

町井 「あ、うーん、そうですね後は、知識を深める事、ですかね」

アオイ 「町井さんらしいですね」

麻衣 「そうだね」

直人「霊界でもいろんなものに興味とか持ってたしな」

アオイ「あれが普通の反応だと思うわよ」

アオ『盛り上がってる所悪いけど次に進むぞ』

アオイ「どうしたのよ」

アオ『長い』

アオイ「・・・その一言でどんな状況下大方予想がついたわ」

アオ『分かってくれて何よりだ。それじゃ最後、見た目いっちゃおうか』

アオイ「これは麻衣さんに答えてもらおうかしら」

麻衣『分かりました』

アオイ「じゃあお願いね」

麻衣『先生は身長175か6位で眼鏡を掛けています。年齢は30代位だと推察します』

アオイ「それで終わりかしら」

麻衣『終わりです』

アオイ「ありがとう。それじゃ今回はこれで終わりにしましょうか」

麻衣「あれ、恵美ちゃんの紹介はしないんですか？」

アオ『最初はするつもりだったんだけど思っていたより長引いてしまい・・・』

アオイ「恵美ちゃんの紹介は次回に持ち越すのよ」

麻衣「そうですか・・・」

絵美「次回は私の一人舞台よ、みんなよろしく!!」

アオイ「絵美ちゃんどうしたの？」

絵美「ちよつとした宣伝を」

麻衣「絵美ちゃんって年幾つなんでしょうね」

アオ『それは次回明かされます』

アオイ「そうね。それじゃ皆さん、今回はこれで終わりなのでもう帰っていいですよ」

直人「次回は俺達の出番ってあるのか？」

アオ『多分無い』

直人 「マジ？」

アオ 『本に氣と書いて本氣だ。^{マジ} つーか君達脇役なのに出すぎじゃない？』

アオイ 「うーん、確かにそうかも」

直人 「あー、それともう俺達の出番は完璧に無いって事？」

アオ 『うん。でもまあ氣が向いたら出そうと思ってる』

直人 「それに期待するしかないか」

麻衣 「それじゃ直君、私達も帰ろう」

直人 「ん、私達？」

麻衣 「恵美ちゃんが寝ちゃったから先生はさつき帰っちゃった」

直人 「そうか。じゃあ俺達もこの辺で」

麻衣 「さようならー」

アオ 『・・・さてと、じゃあ自分達も終わらせますか』

アオイ 「そうね」

アオ 『それでは最後にプロフィールを載せます』

—— キャラ紹介 町井光太

名前：町井光太

職業：中学教師（社会科を担当）

性格：温和

特技：チョーク投げ（百発百中）

見た目：30代中間くらい。眼鏡をかけている。身長は170中間。

友人（家族）：絵美（カメラの妖精）

好きな物・事：美しいもの・綺麗なもの・写真撮影・教育・子ども
嫌いな物・事：陰口など（言うんなら本人の前で堂々と言え。がモ
ットー）

得意な物・事：チョーク投げ（最大射程は20mと言われている）・
事務仕事・テスト作成

（町井のテストは人の急所を的確に狙ってくると生

徒間で有名)

苦手な物・事：子どもの涙・絵美のお願い

趣味：写真撮影・知識を深める

人柄：30代中間だが、まだ所帯は持つておらず独身。生徒達からはその事について日々からかわれている。生徒達の人気は上々で、撮って来た写真も、生徒達は嫌がる素振りを見せているが毎回楽しみにされている。それだけだったらいいのだが、百発百中のチョーク投げと人の急所(勉強してなさそうな所)を的確に狙い打つテスト(小テストも含む)を作っているため、生徒からはスナイパー町井・暗黒のヒットマンという二つ名を付けられ、恐れられている。今回いきなり出来た娘、絵美との関係は良好で、最近は絵美にパパと呼んで貰いたいと思っていたり。休みの日などには、絵美と出掛けて写真を撮っていたりする。

町井光太（後書き）

今回の紹介で最初使おうと思っていたネタを載せてみようかと思ひます。

まあ、所謂没ネタですね。

適当に書いて、「ああ、これは紹介がしづらいな」と気づいたので（遅えよ）中途半端な出来です。その所、ご了承願ひます。

没ネタ

—— キャラ紹介 町井光太

3年〇組 町井先生！！

町井 「はろーハローHello！！！やあこんにちは、みんな大好き町井先

生だよー！！！」

アオイ「ど、どうしたんですか町井さん。そのテンションは」

町井 「チツチツチ、アオイ君、ユーはテンションが低いネー。もつと

マックス！ヒート！ライジイイング！！に行こうじゃな

いか」

アオイ「ま、町井さんが壊れた」

町井 「ふう、私は壊れてなどいないよ。と、こ、ろ、で、あのボーイは

どうしたの、カ・ナ！！？」

アオイ「アオの事ですか？アオは今回はお休みだそうです。私に仕事を押

し付けて自分だけ休みとか・・・」

町井 「Ohシーーーーートツツツ！！なんて事だい！！！」

アオイ「えーと、でも一応代役がいるみたいですよ」

町井「ほうほう、それは興味深いね。私に齒向かう愚かな可愛い子羊

ちゃんは一切何処のドイツかな？」

アオイ「は、入っていいですよー・・・」

直人「・・・なんか隣の部屋まで声が聞こえてきたんだけど」

麻衣「町井先生、こんにちは」

町井「やあ、君達は私の可愛い教え子のミスタ桜井とミス麻衣くんじゃないか！！」

麻衣「先生、今日はとてもお元気ですね」

町井「オフコース！もちろんだとも。今日は私が紹介される日、テン

ションが上がらずにはいられないだろう？OK？」

麻衣「オッケーですよせんせー」

町井「よーしよーし、麻衣くんはとても優秀だね」

麻衣「えへへ、褒められちゃった」

アオイ「・・・何、この二人？」

直人「やけにテンションが高い先生とそれを天然でスルーする麻衣だろ」

アオイ「いや、それは分かるんだけど・・・もういいわ」

直人「それが正しい選択だ」

アオイ「ところでなんで町井さんはこんなにテンションが高いのかしら」

直人「さっき本人が理由を説明してたじゃないか」

アオイ「そうなんだけどね。ねえ桜井君、こんなテンションの町井さんを

見た事ある？」

直人「ないな。先生はいい事があってもあそこまで壊れる事は無かった

はずだ」

アオイ「そう、一体何が原因かしら」

直人「ん、おいアオイ。何か紙切れが置いてあるぞ」

アオイ「あ、本当ね。・・・なにか書いてあるわね」

直人「なんて？」

アオイ「ええと、」

アオ「やあアオイ。これを読んでいるという事は町井さんのテンション

がおかしいと気づいているだろう。そして、何故こんなに

もテンションが高いのか疑問にも感じているはずだ。今からその

疑問を解消してあげよう。町井さんのテンションがオカシイ理由、

それ
は」

直人「そ、それは？」

アオイ「それは町井さんのキャラを壊したかっただけだ。（笑）因みに自

分はそのテンションについていけそうもないので逃げさせてもら

うよ」

アオイ「・・・」

直人「えーと、どうしたんだアオイ？」

アオイ「ふっざけんなああああ！！！」

アオイ「なによこの理由ふざけてんの！？キャラ壊したかっただけ
って、

そんな理由で私はいきなり疲れる思いをしたって事なの！
？それ

に自分だけ安全圏って、うぐるああああああ！！！」

直人「お、落ち着けアオイ。女の子がそついう事言うのは駄目だぞ」

町井 「やあ、どうしたんだいアオイさん。そんな奇声を発して」
アオイ 「ふしゅー、ふしゅー」

直人 「ひ、ひとまず落ち着こうか。先生、アオイは疲れているよ
うなの

で10分くらい休ませますね。先生もそれ位したら落ち着
いてい

てください」

町井 「落ち着くもなにも、私は最初から落ち着いているが・・・」

直人 「いいから！黙って言う事を聞く！！」

町井 「う、うむ」

直人 「よし、じゃあアオイ、何があつたか知らないけど10分間
ゆっく

り休んで頭を冷やせ」

く休憩中く

アオイ 「ふう、なんとか落ち着いてきたわね」

直人 「大丈夫か？」

アオイ 「ええ、心配掛けたわね。もう大丈夫よ」

直人 「そうか、それならいいんだが」

町井 「H H H H H A、アオイさんが落ち着いたようで何
よりだよ」

直人 「・・・こっちは結局治らなかったみたいだな」

アオイ 「・・・そのようね」

麻衣 「元気出してアオイさん」

アオイ 「ありがとう、麻衣さん」

直人 「なあ、よころで娘さんはどこにいるんだ？」

アオイ 「ああ、そういえば見当たらないわね」

麻衣 「先生、恵美ちゃんは何処にいるんですか」

町井 「絵美かい？絵美はねえ、余りにも美味しそうだったから食べ

「ちゃった♪」

アオイ「・・・」

直人「・・・」

麻衣「・・・」

町井「ハッハッハ、冗談に決まっているだろう。イッツアメリカン

ジョーク」

アオイ「もういやだーーーー!!」

直人「アオイどうした!？」

アオイ「こんなテンション普通にしていけないわよーーーー!!」
「!」

麻衣「アオイさん、落ち着いて」

アオイ「やだーーーー!! 帰るーーーー!!!!」

ボタン!!

nd

The e

町井絵美（前書き）

他の人の作品を見てたら前書きの書き方が自分とは少し違っていたので、今回は少しそれに近づけた書き方をしてみます。（前書きだけだね）

つつても書くことがない、何であんなに書けるんだろう。大体は日記みたいになんか近況報告みたいなことしてるけど特に言う事ないし・・・

さて、遅くなりましたが今回紹介するのは前回紹介した人の娘さんです。

町井絵美

アオ 『さてさてやって参りましたキャラ紹介第5弾』

アオイ 「今回は町井さんの娘さんの恵美ちゃんを紹介します」

絵美 「よろしくお願いします」

町井 「よろしくお願いします」

アオイ 「大丈夫、絵美ちゃん。緊張してない？」

絵美 「はい、大丈夫です」

アオ 『ま、何を聞かれるかは町井さんの紹介で分かったはずだから気楽にいきな』

絵美 「頑張ります」

アオイ 「それでは今回は町井絵美、絵美ちゃんを紹介します」

アオ 『最後にプロフィールを載せますのでそれだけを見たい方は下まで一気にスクロールして下さい』

———キャラ紹介

名前：町井絵美

性別：女

職業：妖精

初登場：四話目（天使の撮影）

紹介情報：四、五話

アオイ 「それじゃあ絵美ちゃん、準備はいい？」

絵美 「はい、大丈夫です」

アオイ 「じゃあまず一つ目は、特技を言ってみて」

絵美 「えーと、私の特技は・・・」

町井 「ああ、それは私が答えます」

アオイ 「町井さん？」

アオ 『まあそれが妥当だね。自分の特技を自分で説明するって難しいと思うし』

町井 「絵美の特技は記憶です」

アオイ 「へえ、絵美ちゃん記憶力いいんだ」

絵美 「えと、はい、多分・・・」

アオ 『まあ元がカメラの妖精だしね』

アオイ 「ふうん。それじゃあ次にいきましょう」

アオ 『次は見た目だね』

アオイ 「また自分では答えづらい質問を・・・」

アオ 『まあまあ、ここは自分が答えるから』

絵美 「お兄ちゃん、よろしくお願いします」

アオ 『まっかせるおお!!!!』

アオイ 「・・・いきなりテンションが上がったわね」

アオ 『絵美の見た目は10歳くらいを想像しています。髪は背中まで伸ばしていて、・・・誠

に残念ながらツインテールじゃないです。まあ、それは将来期待するとして。身長は大

体130cm位と考えてます』

アオイ 「なんか途中変なのが混じってた木がするけど・・・いいわ。次いきましょう」

アオイ 「次は家族構成ね」

絵美 「私の家族はお父さん、町井光太です」

アオイ 「よし、じゃあ次ね」

アオ 『因みに何故絵美が家族構成なんて10歳くらいの子どもじや知らないであろう言葉を

知っているかと言いますと、絵美は元のカメラが経験した事なども覚えているものは覚

えているのでそういう言葉を知っていたという設定です。

なので何でこの言葉を知って

いるのにこの言葉を知らないんだ、みたいな事もあるかと

思いますが、知っている言葉

は絵美がまだカメラに宿っている時に聞いた言葉、知らない言葉は聴いたことがない、

又は覚えていないという設定ですのでご了承ください」

アオイ「長い説明ご苦労様」

アオ『ありがとう』

アオイ「それじゃあ次は好きな物・事を答えてもらえるかしら」

絵美「はい。私はお父さんと過ごす時間が好きです」

町井「・・・絵美——！！」

アオイ「あら、町井さんが感激のあまり涙ぐんでるわね」

アオ『そつとしておいてあげな』

絵美「えと、お父さん？」

アオ『ああ気にしないでいいよ。それより好きなものはないの？』

絵美「後は、ええと、自然に囲まれた場所なんかが好きです」

アオイ「なるほど、町井さんの影響ね」

アオ『それで終わりかな？』

絵美「はい」

アオ『よし、じゃあ次は、嫌いな物・事をどうぞ』

絵美「虫が嫌いです」

アオイ「・・・早いわね」

アオ『分かる、分かるよその気持ち』

アオイ「なんか共感しちゃってるし」

絵美「でも霊界には虫がいないのでいいですね」

アオイ「まあそうね。霊界には天使が霊体くらいしかないし」

アオ『そこら辺の詳しい説明はいつか世界観設定で紹介しようと思っています。気長に待って

いてください』

アオイ「よし、じゃあ次の紹介——（質問）にいきましょうか」

絵美「はい」

アオイ「次は得意な物・事よ」

絵美 「えーと、私は写し絵が得意です」

町井 「そうなんですよ。絵美は写生が中々うまいんですね」

アオイ 「へえー、そうなんだ」

アオ 『いいなあ』

アオイ 「もしかしてアオは絵を描くのは苦手？」

アオ 『他人の絵の模倣は少し出来るけど他は全然駄目だね』

絵美 「私と同じですね」

アオ 『ありがとう。自分のは絵美ちゃんの劣化版みたいなものだけどね』

アオイ 「他には何かある？」

絵美 「他には・・・何かあるお父さん？」

町井 「ええと、ないんじゃないかな」

アオイ 「よし、じゃあ次ね。次は苦手な物・事よ」

絵美 「えと、自分で何かを作り出したりするのは得意ではないです」

アオイ 「なんかもうそのまんまな設定ね」

アオ 『そのまんまじゃないと駄目でしょ。こういうのは』

絵美 「え？どういう事ですか？」

アオ 『ああいや、こつちの話』

アオイ 「他には苦手な事ってないのかしら」

絵美 「もうないと思います」

アオイ 「そう、何か今回は結構ペースが速いわね」

アオ 『まあね。自分の小説は無駄に長いから、オマケのこれも長いなんて事は出来る限り避け』

たいんだよ』

アオイ 「その割にはいつも長くなかったかしら」

アオ 『ピーピーピー』

アオイ 「ベタな真似を・・・」

アオ 『ほらほら、せっかく速く来れてるんだからさっさと次にいっっちゃおうよ』

アオイ「なんか釈然としないけど……。次は、能力ね」

町井「これは直人と麻衣、そして私の紹介には無かった項目ですね」

アオイ「そうですね。そして私とミドリにはあった項目です」

アオ『やっぱり能力とかがないと面白くないよね』

アオイ「その意見には同意だけど、その設定をこれから先使う予定はあるの？」

アオ『多分無いね』

アオイ「・・・まあ、例え使わなくても紹介はした方がいいわね」

アオ『でしょでしょ』

アオイ「じゃあ絵美ちゃん、あなたの能力はどんなのかしら？」

絵美「え、と、先ず一つ目は記録です」

アオイ「大体の予想は立つけどどんなのかしら」

絵美「私が視認しているものを、私が能力を使つと記録できる能力です」

アオイ「なるほど。記憶ではなくて記録だから自分から消去しないと絶対忘れないって事ね」

絵美「そういうことです」

アオイ「それじゃ、二つ目は？」

絵美「二つ目の能力は写し絵です」

アオイ「それはどんな能力かしら」

絵美「私が視認しているものを他に物に写す能力です」

アオイ「へえー。そんな能力が」

絵美「さらにこの能力ではさっきの能力で記録した画像を写す事も出来ます」

アオイ「それで終わりかしら？」

絵美「いうえ、最後に一つ。最後の能力は光る事です」

アオイ「えーと、私は分かるけどとりあえずもうちょっと分かりやすく言つて貰えるかしら」

絵美「そうは言つても、本当に光るだけです」

アオ 『補足すると、この能力はカメラのフラッシュみたいなもので、一瞬だけ光を発する事』

が出来るんだよ。因みに光の強さは込める霊力によって上下するぞ』

絵美 「お兄ちゃん、ありがとう」

アオ 『ふ、その一言で十分さおぜうさん』

アオイ「・・・あんた、お兄ちゃんって言われると急にテンションが変わるわね」

アオ 『男なんてそんなものさ・・・』

アオイ「とりあえず苦情が殺到しない事を祈っているわ」

絵美 「えーと、次が最後の質問ですよね・・・」

アオイ「あっと、脱線しちゃったわね」

アオ 『そうだった。よし最後の質問、趣味は？』

アオイ「なんかアオが急にナンパに見えてきた」

アオ 『黙ってなさい』

絵美 「ええと、趣味はお散歩です」

アオイ「子どもらしくていいわね」

アオ 『他には？』

絵美 「後は、探検なんかもよくします」

アオイ「好奇心旺盛なのはいいことよ」

アオ 『自分も小さい頃はよく探検とかしてたなあ』

アオイ「そうだったんだ？」

アオ 『うん。家から半径10km以内なら近いって言える位ぶつ

とんだ感覚を得る位には遠く

まで自転車で行ってた』

アオイ「それは探検じゃなくて散歩じゃない？」

アオ 『当時は旅と称してました』

アオイ「今は？」

アオ 『あ、間違った。今も』

アオイ「あ、そう」

アオ 『つて、今は自分の事じゃなくて絵美についてだった』

アオイ 「そうだったわね。絵美ちゃん、他にはあるかしら」

絵美 「絵を描くことです」

アオ 『すげえ』

アオイ 「アオは絵が駄目だしね」

アオ 『絵、だけじゃなくて芸術関係全てが駄目だな』

アオイ 「町井さんの指導が必要ね」

町井 「いつでもいいですよ」

アオ 『勘弁してください・・・』

アオイ 「さて、絵美ちゃん。もう他にあったりする？」

絵美 「もう無いです」

アオイ 「よし、じゃあ今回はこれで終了ね」

町井 「お疲れ様でした」

アオイ 「ありがとうございます」

絵美 「今日は楽しかったよ。ありがとう」

アオ 『まさかお礼を言われるとは・・・』

アオイ 「どういたしまして」

アオ 『ふう、じゃあ町井さんと絵美ちゃんはもう帰っていいですよ』

町井 「それではさようなら」

絵美 「じゃあねー」

・・・

・・・

アオイ 「じゃ、私達も終わらせましょうか」

アオ 『では最後にプロフィールを載せます』

アオ 『尚、プロフィールに掲載されている順番は紹介した順番とは異なります。そして、紹介

した言葉とは違った言葉で書かれている場合もございますのでご了承ください』

——キャラ紹介 町井絵美

名前：町井絵美

性別：女

職業：妖精

初登場：四話目（天使の撮影）

紹介情報：4～6話

性格：無邪気

能力：瞬間記録

自分が視認している場面や物などを一瞬で記録する能力。
記憶ではなく記録なので記録を

消さない限り忘れる事は無い。記録できる数は24。

念写

自らが視認している場面や物などを他のものに写す能力。

しかし、絵美自身がこの能力を

使いこなせていないので写すものは紙類など、平らなもの
に限る。この能力は瞬間記録で

記録した画像を写す事も出来る。

発光

一瞬だが、強い光を出す能力。込める霊力の強さによって
光の強さが変化する。しかし、

一瞬しか光らないのであまり応用性がない。

特技：記憶

見た目：見た目10歳位。髪は背中まで伸ばしている。身長は130cm位。

友人（家族）：町井光太

好きな物・事：町井と過ごす時間・自然に囲まれる場所

嫌いな物・事：虫

得意な物・事：写生

苦手な物・事：創造

趣味：散歩・探検・絵画

人柄：元気がよく、大抵の場合は笑顔。字は違うが名前の通りいい笑顔で笑う。カメラの妖精の為か写生が得意だったらする。しかしその反面、自分から何かを生み出す事を苦手としている。しかしそれを克服しようと、よく写生や模写ではない絵を描いている。よく能力を使ってその日にあつた出来事などを町井に話している。最近では町井をパパと呼びたいと思っているらしいが恥ずかしさからか、中々言い出せない模様。

町井絵美（後書き）

早いものでこのキャラ紹介、もう5話目ですよ。その内本編超えるのではないのだろうか。まあ、できるだけ超えないようにはしようと思っと思っていますが・・・

さてさて、今回紹介したのは町井絵美ですが、いかがだったでしょうか。別に紹介する必要ないだろ、と思う方、すいません。

あともう一つ謝るとするなら、本編の投稿はまだ先という事についてです。本編を更新する前に世界観設定を更新しないといけないのでまだ暫くは更新されないと思っと思っています。とりあえずもうキャラ紹介は終わりました。後は世界観設定だけです。本編投稿をお待ちにされている方はもう暫くお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1262t/>

天使の仕事 ～キャラ紹介～

2011年10月8日14時55分発行